

80年代の
日加交流

橋田忠明

いささか旧聞に属するが、昨年五月の故大平首相のカナダ訪問の際に、その日を待ちに待っていたカナダ人たちがいたのではない。「我々にとっては記念すべき集いがあるのですヨ」と取材先のカナダ外務省のA氏がこっそり打ち明けてくれた。東京のカナダ大使館や企業に長い間駐在していた「日本ファン」のカナダ人有志が初めて一堂に会し、旧交を温める計画だというのである。

よく聞いて見ると、ランキン駐日大使夫妻が一行とともに帰任するので、オタワで集まって、盛大にパーティを開き、日本のことや帰国した後のカナダでの仕事振りを披露し合うという興味深い試みである。「今回はオタワ周辺の人たちにしぼったが、それでも二十人はこえると思う」とA氏は胸をはずませていた。

確かにこのところ、日本でなじみの深いカナダ政府の高官やビジネスマンたち

の帰任が目立つオタワ、トロント、モントリオール、バンクーバーなどで、在日期間の長いこうしたカナダ人が色々と話題になりだしている。

たとえば、カナダ大使館で長く勤め、日本語も堪能なタークセン氏。カナダ外務省に帰任して一年近くになるが、「省内で余り日本の素晴らしさをPRし過ぎたので、『日本シンパ』のレッテルを張られかねない有様。上司から日本のことは一時忘れよ、とクギをさされて弱っています」と苦笑する。家族は「望郷の念(?)」しきりで、奥さんまでが「東京に帰りたい」と時折り口ごもるといふ。同氏は対日関係とは全く別の部署だが、日本のこととなると必ず声がかかるようだ。

「カナダの叛乱」で有名なケベック州にもいる。州政府の国際担当のベルニエ氏。陽気で、話し好きな仏系カナダ人。同氏の部屋を訪れると、日本的な静かな雰囲気。ベルニエさんも日本流の奥の深い物腰を尊重しているらしく、話し振りまで日本的な紳士を感じさせる。

「数年振りに帰って、ケベック独立の嵐を肌にした。見聞きする何もかもが新鮮だ。だが、州政府やモントリオールの関係者たちと話し合っていると、余りにも日本の現実を知らないで、観念でとらえる面に気付く」と指摘する。同氏はケベック州が独立をバックに海外で最も力を入れようとしている日本、東南アジア各国の担当を志望し、「東京駐在の間に州政府や企業トップに幅広く人脈を築い

たので、それを有効に生かしてケベック州に『日本革命』を起こしてみたい」とデッカイ構想を披露していた。

カナダ外務省の広報担当のアンドレ・シマード氏も隠れた「日本通」である。クリスマス・シーズンともなると、同氏の部屋は日本からのカードで埋まる。「重要なセクシオンなので、分けへだてができないが、日本からの記者が取材に来ると何かしらホツとする」というほどの日本びいきだ。

カナダでの取材先の友人の一端を紹介しただけだが、各地に、こうした日本人がよく知り、日本を愛して帰国したカナダ人がふえている。大学の先生にも多い。そうした人たちと話していると、日本では欧米各国に比べて、まだ知られていないカナダのPRに苦心し、いつも日本とカナダの文化の比較を考えてきた点が共通しているようだ。そして、日本でのカナダ理解に歯がゆかったように、カナダに帰ると今度はカナダ人の日本理解の少なさに不満を感じている様子だ。とりわけ、カナダに欠けている日本の歴史や伝統文化に造詣を培って帰った人が多く、公けの場や日常生活で日本文化をPRして貴重な存在になっている。

それと、驚くべきなのは誰もが日本語を話せる点である。取材先のひとりには「日本に駐在している折りに、日本語を勉強しない米国人や欧州人を多く見た。だが、本当に日本を勉強するには日本語を身につける必要がある。カナダ人は割合この点努力していると思う」と胸を張った。

それが、オタワや州政府の日本担当の人たちにロコミで伝わり、夏休みを利用して日本語を勉強する空気が広がっている。

日本とカナダの外交関係は故大平首相の訪問以来、八〇年代の新段階に入ろうとしている。今年七月にはオタワ・サミットが開かれ、カナダが脚光を浴びよう。トルドー首相やマクギガン外相は「三方位外交」を打ち出し、米国、欧州とともに、日本など東南アジアに新しく主力を注ぎようとしている。ことにトルドー首相は他の友好国がレーガン米大統領の政策の分析に奔走している間に、中近東、中南米を歴訪し、外交経験の長い宰相のしただかきを見せた。今年からは対米協力を主軸にしながらも、一味異なった外交を推進していく方針という。その中で、日本など「環太平洋圏」は主要な位置づけを与えられよう。

混迷する国際政治に、首脳外交も重要ではある。だが、一国の文化、社会、歴史はその国に住んでみないと本当に分らないという点も事実である。これからの日加交流には政治、経済だけでなく、社会、文化に対する相互理解がこれまで以上に欠かせなくなる。カナダで取材していて、ひとつの提案がある。カナダと日本で長期間滞在した官民の人たちを組織化し、両国の交流にパイプをつないだらどうだろうか。最近、相次いで帰国するカナダの友人たちを取材しながら、このことを切に思う。